

頸椎症（宮沢貞雄氏症例 2）

日系男性 マリオ 四七歳

主訴 頸椎症。

現症 整形外科でこのように診断される。非常に危険な部位なので手術できない。十年来頸の凝り、毎日頭痛を覚える。薬服用。ふらつき、膝痛（走った後）。

所見 「やや細・数」、腹診全て（-）、行間左（+）、魚際左（+）大都左（+）。

治療 ①「扁桃処置」、
②「気水穴処置」、「中封・曲泉」で「行間」（+）→（-）、
「陰陵泉」で「大都」（+）→（-）、
「尺沢」で「魚際」（+）→（-）になる。

伏臥位①「大腸俞」、
②「脊柱起立筋緩和処置」、
③「会陽」（膝の運動をさせると違和感すべて消える）、
④「環跳」、
⑤「帶脈」（頸の運動をさせる、すごく楽になる）、
⑥ふらつきに「C7.T1~3 横V字」、
⑦「天柱・風池」。

治療した後、気分がとてもよいという。（この人は鍼が怖くてとても敏感な体質だった）。

経過 二回目（四日後）、頸の凝り・痛みほとんど無い。こんなに良くなったのは十年来と喜ぶ。

「細・数」、腹診すべて（-）、行間左（+）、魚際（+）、大都（+）。前回同様の処置。

印象深かったのは、帶脈を雀啄しながら頸を動かさせるとすごく楽になり、頸のクリクリ音まで取れてきたと驚いている。

四回目（二日後）。頸の凝り、頭痛すべて取れてその後来院ない。

帶脈の効果は知っていましたが、驚きました。この後、腰痛、膝痛、頸腕痛などいろいろ治療していますが、長野式治療で、より自信をもって患者さんに対応できるようになりました。

彼の症例に添えられた手紙に、地元の新聞に四回にわたって日本の長野式治療システムが掲載されたこと、サンパウロの鍼灸学会で長野式を発表してくれと依頼があったことが嬉々として書かれていました。